

●特集●

## 保育における「主体性」を問う

### 「主体性を育むためのポートフォリオ ～飲みたくない水は飲まないの一考～」

笹井 邦彦

子どもたちの成長は、日々感じられ、正に急成長していると言って良いと思います。そして、その多くは、家族、子どもたち同士、保育者等々との関わり合いにおいて何かを感じ取り、吸収し、そして自分のものへと日々深化、発達していると言っても良いかもしれません。

ただ、ふと感じることは、その関わりにおいて子どもたちは、どのように他からの溢れんばかりの情報を取捨選択し自分自身のものとしているのかということなのです。

タイトルに挙げさせて頂いた言葉はイギリスのことわざで、「You can lead a horse to water, but you can't make him drink.」です。もとは馬を例えにしていますが、人は他人に対して機会を与えることはできるが、それを実行するかどうかは本人次第であるという意味と捉えられています。

つまり、子どもたちも「飲みたくない水は飲まず、飲みたい水を飲んでいる」と捉えられることとも考えられ、その視点はとても大切だと言えらるのです。

とりわけ、今回のテーマである主体性については、本来は押しつけられ、言われた通りに出来ることを意味するものではなく、自分が本当の意味で感じ、そしてそれを自分のものとして表出するものです。その設定、動機付け、保育者等々との関わりにおいて、個々の子どもの飲みたいタイミング、飲みたくなるような環境、こう言ったことを視点として捉えることは大変重要だと思っております。

そこで、今回は多くの識者の提唱の中から、脳神経の領域である、ニューロンとシナプスについて、触れさせて頂きたいと思っております。

ご存じの通り、子どもの成長と発達について大脳

生理学分野で保育を含めた数多くの提唱をなさっている時実利彦先生をはじめ多くの知見から得ることが出来ていますが、今現在、脳神経科学の領域でわかっていることは、ニューロン神経細胞がシナプスを介してネットワークをつくり、結果、そのネットワークのつくりが人の成長にも大きな影響を与えていると言う知見があります。また、これらの過程でとても重要なこととしてシナプスは、場合によってその大きさや形状が様々で、弱い伝達、強い伝達という具合に変化していると言うこと、つまりは時と場合によって、その形状、つまりは子どもの発達に大きな影響があることとして見て取れます。

神経心理学者の杉下氏は、子どもの成長過程において、子ども個人が必要を感じた場合に、ニューロンに強力な鞘が出来上がり、シナプスが大きく繋がるという見解を、筆者が受けた講義の中で主張されていました。

つまり、子どもが必要を感じないとどのように素晴らしいもの、ことを提供しても、ニューロン同士の強いつながりにはならないということが言えます。

そこで私は、現在多くの実践書で示されている0歳、1歳ではとか、2～3歳ではなど、年齢に則した考え方が多く散見できますが、これはあくまで大きな括りとして捉え、基本的には保育者の経験的尺度を尊重しながら、保育成果等のポートフォリオ（※本来は教える側と教えられる側共通の学習記録ですが、適切なネーミングが必要かも知れません。例えば、医療用語ではありますが、「子どもカルテ」としても良いかもしれません）により一人一人の子どもの特性、状況、経験、発想、表現方法等々の記録から少しでも「おいしい水」を発見できるようにすることが大切なのでないかと思っています。

ですので、これは当たり前のことですが、子ども一人一人の内面的欲求の探索と言うことになるのでしょうか。子どもたちから表出される表面的な事象は、多くの場合、内面性と差異があります。

その差異と本来の欲求を見分け、その内容を基に

#### 日本保育学会会員のみなさま

現在、広報委員会では、本会報を電子化し、ホームページ掲載とすることで検討を進めております。

つきましては、会報の発行についてはメールでの送信になりますので、保育学会へ登録したメールアドレスを今一度、ご確認いただき、未登録の方は登録するようお願い申し上げます。 広報委員会委員長 上田敏文（名古屋市立大学）

主体性を育む保育の設定が必要であり、これはまさに日々の積み重ねによる努力が必要であることは言うまでもありません。

子どもたちに「おいしい水」が提供されることを願って止みませんし、共に考えていきたいと思っています。

#### ●Profile

笹井 邦彦 (ささい くにひこ)

東京家政大学家政学部長、家政学部児童学科教授、東京家政大学大学院児童学児童教育学教授

音楽教育領域全般を研究テーマとしているが、「保育における音楽表現」「子どもの歌の編曲、作曲」「音楽療法」等である。また、編曲における即興演奏をテーマに都内でジャズライブを行っている。

## ECECから18歳までの主体性を育むために私たちに求められること

中田 幸子

OECD Education 2030 プロジェクトが掲げられ、日本においては「主体的・対話的で深い学び」が教育の柱となっている。これは、VUCAの時代に対応していくことができる人間像をめざすということだろう。さて、乳幼児期は、すべての学びの基礎であり、小・中・高との連続性を持った学習へと繋がるスタート地点である。保育における主体性だけに視点を置くのではなく、ECECから18歳までの連続性、そして子どもたちを支える私たち大人の主体性までを視野に入れて考えたい。

私の住む佐野市では、設立母体を問わずECECに関わる施設の職員から成り立っている佐野市Strong Start 研究会 (SS研) がある。SS研では、年1回「公開保育」を行い、お互いが学びあえる環境を作っている。また、市民を巻き込んだ「佐野市子ども・子育て市民フォーラム」も開催している。そのSS研で、OECD Education 2030 のラーニングコンパスの中で重要とされている「Agency」の勉強会を2年前から行っている。そのきっかけとなったのは、佐野市と「保育・教育・研究交流連携事業に関する協定」を結んでいるCedep (東京大学発達保育実践政策学センター) との交流である。勉強会には、Cedepから講師として野澤祥子氏を招請し、各園の園長や保育者たちが参加している。そこでは、Agencyの基礎知識を学ぶとともに、参加者が事例を持ち寄り、どのような文脈の中で子どもたちのAgencyは育まれているのかなど、お互いの対話を中心に理解を深めている。このような学びは、参加者個人の保育の視点を深めるだけではなく、各園に持ち帰り共有することで、園全体として保育の見方・考え方を深めていくことになる。このような保育者たちの学ぶ機会は、互いを高めあい、地域の保育の質の向上にも繋がっている

だろう。

一方、見えてきた課題もある。ECEC各施設の特徴ある保育は認められるべきだが、どこの施設で保育を受けても、指針・要領に基づく、質の高い保育が受けられることが望ましい。SS研での学びが、地域のすべてのECECに行き渡っているとも言いがたい。今後は、地域における横の関係の中で、学びあいをさらに深めていかななくてはならないと感じている。

また、現状、縦の繋がりを恒常的に持てるような場がない。例えば、当園では、県・市教育委員会担当者の熱意に支えられながら、8年にわたり地元の小学校と幼小連携プロジェクトを行っている。保育・授業参観と研究会から相互理解を深め、緩やかな接続を目指し、その報告は、地域の保・幼・小接続研究会等でも共有してきた。しかし、その考え方や方法は、他校までは届きにくい。その上、今後、担当者が異動になった際、同様の研究会を行っていくかどうかの不安も拭えない。

そのようなことから、ECECから18歳までの縦と横の連携・接続を通して相互理解と質の向上を目指すプラットフォームが市教育委員会の中に作れるとよいのではないか。そこには事業担当者を置き、それぞれの教育関係者が主体的に関われるような場になっていくならば、本当の意味での地域全体の保育の質の向上に繋がるだろう。そのことにより、各教育機関の接続がより円滑になることが期待できる。そのためにも、私たちが現場の立場から行政に働きかけをしていくことも必要だろう。

繰り返しになるが、ECECから18歳までの連続性をもった教育・保育の中で、主体性を育むことは大切である。そして、私たち大人も主体性をもって自ら社会を変革していこうとする力が求められる。まさに今、私たち自身にもAgencyが求められているのだろう。

#### ●Profile

中田 幸子 (なかだ さちこ)

学校法人中山学園 認定こども園あかみ幼稚園 園長  
働きやすい職場と保育の質の向上を共に目指すための、ICTを使った保育記録による時間短縮と保育分析を深める有効活用とは。また、子どもを中心としたまちづくりにも関心を持っている。

## “主体”者としての乳児を尊重する保育実践の喜びを求めて

石丸 るみ

乳児を主体として個を尊重するかかわりは、集団で営まれる乳児保育では、情緒的な絆を形成する重要なかかわりとして例えば緩やかな担当制は保育所保育指針にも示されている。しかし、一方で、個別の子どもを意識すれば全体が見えない不安が高まり

うるし、担当していない子どもとの関係形成や勤務時間の問題など常に保育者に困難感を生起させる<sup>1)</sup>。

私は保育現場にいた。そのときの経験について、日本保育学会第67回大会(2014年)口頭発表では帆足暁子先生の助言を受けはじめての発表をした(発表タイトル「乳児期における社会性の芽生えに関する一考察」)。実践を通して見出してきたことは、2歳児でも、他児を思いやる姿へと変貌する姿を体験したことである。つまり乳児期からでも社会性の芽生えと考えられる発現を確認したことである。しかし、その実践経過で「先生は子どもの言いなりになっているからクラスの子どもがワガママになっている」と指摘を受けることがある。子どもの気持ちを聞くことは自己主張を育むことになる。やだ!と言われれば計画は先に進まなくなる。しかし、だからこそその先に子どもの思いを受けとめながらも、大人側の計画との折り合いを探るかかわりをする。このような試行錯誤の経過は他の保育者との協働性を常に課題とした。

今回のテーマを見て、改めて乳児を主体としてその保育実践を問い振り返るとしたら、言葉も言えない時期からその思いを汲むそのものの保育方法が、果たしてできるのか、見えない先を個々の保育者自身が悩み探りながら続ける実践そのものに意味があるのではないかと考える。

私の保育者としての起点は、石井哲夫先生の施設実習先で自閉症の子どもたちと出会ったことである。子どもに近づくと、激しい奇声をあげ自分の顔を引っ掻く行為を引き出すことになってしまった。次の日から子どもへのかかわりはできなくなる。石井哲夫先生は私たちもわからない中でやっているんだよと笑い、次の日から1人の男の子と過ごす実習を指示された。その子どもへ同じ失敗を繰り返す恐怖もあった。でも“その子がしたいことと同じことをしてみる”ということで、少しずつ関係が変化することを体験する。

第二の転機は新人保育士のときの本吉圓子先生との出会い。学校で学んできたことをまず考え、子どもを愛し可愛がることの重要性を示唆されたことである。保育実践の中で乳児を愛することはなんだろう?例えば排泄が自立するとか、嘔み付いてしまう出来事をどのように自分の中で折込み理解したら良いのか。

その後、どこで働いても子どもは1人として同じではない。様々な保育者とも組む。どのような場でも子ども(乳児を含む)自らが行動を起こす姿を尊重しながら成長や発達を支え、そこに保育者として子ども自身が持つ育つ力に感動する毎日を、送りたいと願う。その課題への全ての答えは当時手にした平井信義先生が執筆された冊子<sup>2)</sup>にあるように思えた。平井先生は子どもの自主性自発性の尊重の重要性をあげ、その基盤は情緒の安定があると述べていた。

子どもの自発的な学び(教育)とケアの一体性が示されていた。保育実践を重ねる現場で「それは違うのではないか」と指摘してくれる後輩や先輩。評価や改善が日常的にそこには含まれる。大場先生は保育者が有する子どもとの相互の関係を経た経験を保育の臨床性<sup>3)</sup>と説明している。

実践の場に在った者として思うのは“保育者が抱っこしてあげたいと感じた時に抱っこしてあげられる場所”にするためには、子どもの身近にいる保育者だからこそわかる、子どものための悩みを、言葉を、語るべきだということである。真摯に丁寧に聴き共に歩む質的な保育実践の研究アプローチ<sup>4)</sup>こそが今この瞬間にも求められていると考えている。

#### 引用文献

- (1)石丸み・本山片子(2020)ある乳児保育担当者に困難感とその対処の過程. 日本保育学会第73回大会
- (2)平井信義(1980)乳幼児期における人格形成. 日本女子社会教育会. 10-47
- (3)大場幸夫(2010)子どもの傍にあることの意味. 萌文書林. 115-128
- (4)無藤隆(2019)解釈記述アプローチ. サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編、質的研究法マッピング特徴をつかみ、活用するために. 新曜社. 93-100

#### ●Profile

石丸 るみ(いしまる るみ)  
大阪総合保育大学 准教授  
専門は乳児保育学。日本ではじめて設置された乳児保育学科で教員として学生指導を行いながら、保育現場の主体者としての保育者側に立つ研究を目指している。

## 主体的に「新しい園生活」を築き上げる5歳児の姿から

阿部 能光

私たちの園では、「幼児期の主体性を伸ばし、自分で考え、決め、行動できる子に育てたい」と願っています。そして、「幼児期の主体性」を伸ばすためには、園生活において、保育者が指示的ではなく対話的・応答的に関わりながら、子どもたちが力を発揮して、自分たち自身で考えたり決めたりする機会をできるだけ多く用意することが必要だと考えています。

私たちの園では、2018年度より、鈴木正敏先生(兵庫教育大学大学院 准教授)に年間5回の園内研修でご助力をいただきながら、楽譜という正解に向かって反復練習をしていただけの音楽会を、文化祭「いぶきわくわくフェスタ」へと進化・発展させました。

フェスタは、子どもたちが主体となって、自分たちが「やってみよう!」と思ったこと、「これをやり

たい！」と実現にこだわったこと、保護者を含むお客さんに「見て見て！」と見せたくなくなったことなど、子どもたちの「遊び」と「学び」と「思い」を中心に構成しています。

出展内容は歌や合奏に制限せず、ダンス・ショー・劇・お店屋さん・パビリオンなど、各クラスで子どもたちと保育者が一緒に話し合いながら、自由に発想をふくらませていきます。

また、音楽会からフェスタへの進化・発展をきっかけに、園生活の中で日頃から「考える（状況を分析する、相談する等）→やってみる（実行する、試す等）→振り返る（良かったところ、困ったところ、課題解決等）」という、仮説検証思考に似た「学びのサイクル」をたっぷりと経験できるよう、保育内容が全般的に変容してきました。

入園時からこのような園生活を積み重ねてきた子どもたちが、2020年度は5歳児になりました。すると、コロナ禍が発生して誰も正解がわからない状況下において、6月の登園再開以降、5歳児そら組の子どもたちは、自らコロナウイルスについて調べ、クラス担任と一緒に感染症対策を考え、実行し始めました。そら組の主な活動の履歴は以下の通りです。

#### 1学期

- ・自分たちのコロナウイルスに関する疑問をアンケートにし、保護者と教職員へ配布する。  
回答から得られた知識を踏まえながらコロナウイルスについてさらに調べ、感染症対策について話し合う。
- ・1mのソーシャル・ディスタンス棒を携えて園内各所を調べて回り、男子トイレに飛沫防止ボードを製作・設置する。
- ・アルコール消毒液とその使用を呼びかける看板を園内各所に持ち運んで設置する。
- ・自分たちがこれまでに知ったことをコロナウイルス新聞にし、全学年へ配布する。
- ・足踏み式消毒台を自作しようと試み、その構造を調べ始める。

#### 2学期

- ・足踏み式消毒台のバネの構造を解明するのに苦心しながら試行錯誤を繰り返し、最後は園長に手伝ってもらい、足踏み式消毒台を完成させる。
- ・フェスタでは回転寿司・お菓子屋さんと合わせて、マスク屋さんも出店する。

#### 3学期

- ・一年間の園生活と感染症対策を振り返り、オリジナルの劇を製作し、生活発表会で発表する。

「コロナ禍でも（コロナ禍だから）出来ること」を、保育者が子どもたちと対話的に関わりながら一緒に考え続け、保育者はその考えや意欲を受け止め、子どもたち自身が考え続けられるよう活動を展開していきました。そして、子どもたちも保育者も、一緒

に成長する歩みを止めませんでした。

鈴木正敏先生は、「これからの子どもたちは、環境を大人から与えられて受け身的に生活するのではなく、自らが主体的に環境を変えていくことに慣れてくるでしょう」とおっしゃいます。自画自賛になりますが、そら組の子どもたちは、まさにそのような姿を体現していたと思います。

今後の彼らの成長が楽しみであると同時に、これからは園生活で子どもたちと保育者が自らの主体性をいかに発揮できるよう、支え続けていきたいと思っています。

#### ●Profile

阿部 能光（あべ よしてる）  
学校法人鈴蘭台学園認定こども園いぶき幼稚園 園長。園のスローガンは「やってみよう！があふれだす」。  
養成期から一貫した保育者の成長過程および学習過程に関心がある。また、ミドルリーダー層の育成と園の組織風土改革の実践に励んでいる。

## 「やりたい！」が発揮される生活を目指して

宮里 暁美

私が0歳の保育室に入ると子どもたちの視線が集まる。あまり馴染みのない大人の登場に動きをピタッと止める子もいれば、保育者の服をギュッと握る子もいる。子どもたちを緊張させてしまったことを詫びつつ、侵入者に対して身構え情報を収集しようとしている子どもたちの姿に感心する。人は生まれながらに主体的だという思いを強くする。

「オギャー」という大きな産声を自らあげることで呼吸を始めることから分かるように、人は主体的な存在としてこの世に登場する。ところが、成長に伴い「主体性」という言葉は課題として語られがちになる。「主体性に欠ける」「自分から遊び出せない」などである。

生まれながらに主体的だった子どもたちなのに、どうしてこのようなことになってしまうのだろう。この問いの答えを私は我が子の姿の中に見つけた。

我が子が保育園に通っていた頃のこと、連絡帳に「Kくんは水遊びを嫌がり、水の中に入れようとすると足を縮めて嫌がります。」と書かれていた。我が子が水遊び嫌いとは思っていなかったのが驚き、休日に実験を試みることにした。

ベランダに水を入れたベビーバスを置き、息子を抱き上げてそこに入れようとした。すると彼は連絡帳に書いてある通りに足を縮めて泣き出した。わざわざ確かめてしまった自分に苦笑しつつ、我が子を抱き上げ「ごめんね」と謝りながら、せっかくなのでそのままベランダで遊ぶことにした。

しばらくして気づくと息子がバシャバシャと水を

触り出していた。カップに水を入れたり出したりし、夏の日を受けて水しぶきがキラキラ光るのを見て笑い声を上げ、それからヨッコラショと足を上げて水の中に入っていった。

抱き上げられて水に入れられそうになると不安になる。自分のペースで少しずつ楽しさを味わうと自分から水の中に入っていく。息子の姿から大事なことを教えてもらい、そうか、そうなんだねと私は自分に語りかけていた。

人は準備が整っていないのに「無理やりさせられる」と不安になり、自分のタイミングで「主体的に行動できるとき」生き生きと行動し始める。主体性が乏しい子どもがいるのではなく、主体的に行動しにくい状況が主体性の発揮を阻害し主体的に動けない子どもを作り出しているのではないだろうか。

それ以来、子どもたちが主体性を発揮できるようにということを目指した保育を追求してきた。2016年4月より関わっているお茶大こども園では「やりたい!」が発揮される生活をテーマに研究を行った。図は、子どもたちが自分の力を発揮するために必要なことを表している。

子どもが始めたことをまず大事にし肯定的に受け止め共に味わう関わりを重ねる中で、子どもたちの中に「もっとやりたい」が生まれる。子どもが発案したことを受け止め生かす生活を展開する中で、子どもたちは生き生きと遊びや生活に取り組んでいく。「やりたい!」気持ちが循環していく生活作りが大切だと考える。

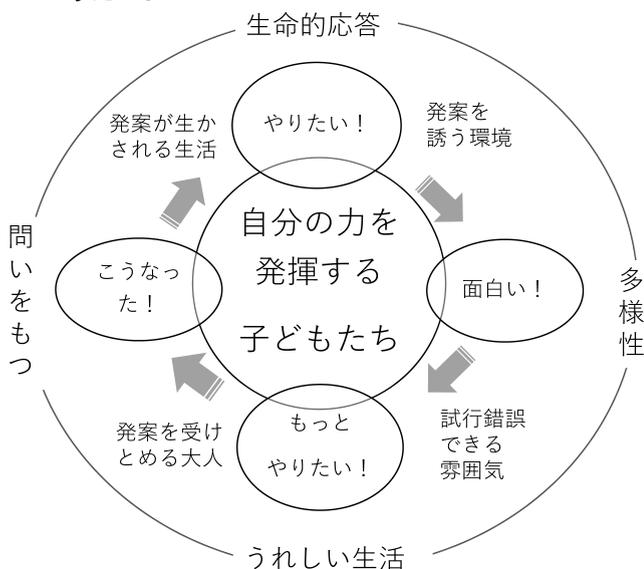


図 「主体性の発揮」構想図 (宮里2021)

#### ● Profile

宮里 暁美 (みやさと あけみ)  
 所属：お茶の水女子大学アカデミック・プロダクション特任教授 文京区立  
 お茶の水女子大学大運営アドバイザー  
 研究テーマ：「くらし(食・創・美・喜)」という視点から保育を再構築。認  
 定こども園の独自性と可能性の追究。子どものしぐさやつぶやきから子ども  
 の世界を探究。保育マネジメントの在り方や子育ての喜びを感じ取る子育て  
 支援の在り方についての検討。

## 「モノの主体性」と「ヒトの主体性」

細田 直哉

ある日、保育室からモノがなくなったら、子どもはどんな姿を見せるでしょう？普段、主体的・協同的に遊び込んでいる子どもたちなのだから、何とか自分たちで遊びを考え出すのではないか。実験前、担任の先生は期待を込めてそう予想していました。

しかし、モノが消えた保育室に入ったとたん、子どもたちは普段とはまったく異なる姿を見せたのです——大声を出して走り回り、友だちを追いかけ、叩き合う子までいました。

モノが消えると子どもの姿が一変する：この事実を前にして2つの疑問が浮かんできます。①なぜ、そうなるのか？②どちらの姿が「主体的」なのか？

①なぜ、そうなるのか？：ふつう私たちは「子どもの姿」の原因を子どもの「内部」に求めがちです。すなわち、「子どもの思い」が表に現れたものが「子どもの姿」である、と。しかし、「子どもの思い」の出発点は子どもの「内部」ではなく、環境との「接点」にあります。その「接点」において子どもの思いを触発し、主体性を喚起するのは、行動を支える環境の性質＝アフォーダンス（「～ができる」という可能性）の知覚です。

あらゆる行動は環境のアフォーダンスへの応答です。もちろん、落ち着いて遊び込む普段の姿も。そのため、それが失われた時、落ち着いた行動も同時に失われてしまったのです。そして、モノのない床と人だけの環境で遊ぶには、残されたわずかなアフォーダンスに応答するしかありません。それがあの姿だったのです。

②どちらが「主体的」なのか？：モノがある時の姿とない時の姿——どちらが「主体的」なのでしょう？保育者の意見で一番多かったのは「どちらも主体的」という回答。理由は「どちらも保育者の指示がないから」。ハッとしました。多くの現場の保育者にとって、子どもの「主体性」は何か「ある状態」ではなく「ない状態」として理解されているのです。この理解に基づけば、「主体性」を育てるためには「何もしないことが最善」ということになり、誠実な先生ほど何もできなくなってしまいます。

そこで別の見方を提案したいと思います：「ヒトは環境にあるモノの声を聴き取り、モノの主体性を生かすことを通して自己の主体性を発揮する」という見方です。「モノの声を聴き取り、モノの主体性を生かす」というのは、「環境の多様なアフォーダンスに応答する」ことをイメージしていますが、それだけにとどまりません。

たとえば、ネイティブ・アメリカンは焚き火のとき、木を切って薪にするのではなく、自然に落ちてくる枝を拾い集めて薪にしたそうです。この振る舞

いを支えているのは、自然を単なる「材料」とみるのではなく、ともに生きる「主体」とみて、その声を聴き取り、対話しようとする感覚です。こうした感覚をもって生きるとき、私の生きる環境すべてが私の友となり、それをケアすることにおいて私はその環境の中で尊厳をもった「主体」として立ち現れることができるのです。この見方から、豊かな保育環境のイメージも見えてきます。それは「小さなモノのかすかな声も聴き取られ、多様なモノの声が響き合う交響的な環境」です。生命の多様性が息づいた自然環境がその典型ですが、室内環境もそれに倣って構成することで豊かな主体性や創造性が育まれる環境となります。その観点からみれば、多様な主体の成立の可能性のない、床だけの空間は保育環境としてはやはり貧しいことがわかります。

### ●Profile

細田 直哉 (ほそだ なおや)

聖隷クリストファー大学社会福祉学部・准教授

子どもの遊びを見ていると、ひとつの世界が生まれ、変化し、消えていく様子が見えます。それはまるで文明が誕生し、変化し、消えていく歴史を見るようで、世界のすべてを解き明かす鍵がそこにあるかのように僕は研究してきました。でも、最近思うのです。研究するより、ともに作る方が人生なのではないか、と。

## 揺れ動く関係の状態としての主体性

川田 学

明治維新とともに輸入された多くと同様に、主体性も生活知や身体知を基礎としないまま純粹に言葉として使われるようになった一例だと思えます。英語で言えばsubjectに当たるこの言葉の西洋語源と日本における受容・変遷史については、小林敏明氏の『〈主体〉のゆくえ』（講談社）に詳しく描かれています。抽象的な言葉を翻訳することの難しさは、言葉というものが、当該の言語システムの特定の布置関係に置いてこそ意味の全体性を理解できるところにあるのでしょうか。subjectは、主観、主体、主題、主語というように“主”を冠した訳語が当てられるとともに、臣民、従者のように“主”とは真逆に思える訳語され当てなければならなかったのです。そこには、西洋におけるsubjectの意味をめぐる転倒の歴史が潜んでいます。

戦後日本では、戦前の軍部の過ちを批判するだけでなく、「われわれ」自身が過ちに加担したことの罪を問う文脈で「主体性論争」が高ぶりを見せました。それは多分に倫理的な主体性への問いです。しかし、学生運動等の行き詰まりや凄惨な結末があり、代わって時代の表面に現れた消費生活＝消費者という新しい美德と存在様式を前に、主体（性）はどこか胡散臭いものとして遠ざけられたのだと思えます。

かつて、倫理的あるいは政治的な衣を纏っていた

主体性という言葉ですが、現在の保育界においてはその色合いはほぼ脱色されているようです。だからこそ、注意深い定義づけと使用が必要だと考えています。というのも、倫理的・政治的に脱色されるように見えるこの言葉が、実際に使われている文脈では、明らかにある価値を纏っていると思われることが多いのです。たとえば、「主体的に取り組んでいた」と言ったとき、そこには「自ら積極的・能動的・活動的に」といった子どもの姿の質が読み込まれていることが多いですし、そうした姿はしばしば大人にとって喜ばしいものです。また、「主体性とわがままの線引きが難しい」という声もあります。この表現からは、主体性とわがままは対立的なもので、そこに線を引こうとする大人の意識があります。しかし、もしこの二項対立を置くとしたら、子どもの主体性とは常に大人の尺度の内側でしか認められないことになります。

主体性を、大人の望む姿＝優等生<sup>くびき</sup>の軛から解放することは、果たしてできるのでしょうか。私は、拙著の中で、主体性を「その子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態」と定義しました（『保育的発達論のはじまり』ひとなる書房）。それは、子どもたちが常に身の回りの環境や他者との関係を生きているという素朴な事実をふまえた定義です。

主体性を個人の中に求めることは、ラッキョウを与えられたサルが、“皮”を剥こうとして“実”を求め、結果的に何もなくなってしまう状況に似ています。一方で、私たちが見ている現実は無ではなく、そこには日々有意義な出来事があります。子どもたちは、その出来事の誕生にいつも何らかの貢献をしています。保育にとって重要なことは、子どもたちが何に、誰と、どう関わりをもっているかをつぶさに見て、その経験や面白さの中身を想像し、仮説をもって、次の関わりや環境を考えていくプロセスにあると考えています。読み取っていくのは、子どもそのものというよりも、子どもと周囲との関係の方です。関係を見ることは、そこで起こっていることを単純に個人に帰属しない構えを要請します。これは、物事を因果関係で説明することに慣れてしまった我々と、我々の言語システムにとっては苦行ともいえるでしょう。でも、だからこそ「関係の状態」をとらえる努力が必要なのだと考えています。

### ●Profile

川田 学 (かわた まなぶ)

北海道大学大学院教育学研究院・准教授。発達心理学と保育実践の間をウロウロしています。院生時代から研究テーマを答えることに窮してきましたが、基本的に事象の“成り立ち”に関心があります。最近、ある保育の場が生まれた経緯と、その実践に人びとがどのような願いや期待を持ち、また変遷してきたのかという関係史に関心があります。

## 若手派遣

### The 21st PECERA Annual Conference発表報告

服部 沙織 (椋山女学園大学大学院)

この度日本保育学会の若手派遣支援の助成を得て、2021年7月にニュージーランドのウェリントンでオンライン開催された環太平洋乳幼児教育学会(PECERA)の大会でポスター発表を行いました。“How do Japanese Mothers Recognize their Role at the End of their Children’s Early Childhood?”というタイトルで、幼稚園卒園を控えた園児の母親が認識している母親としての役割に関する研究です。

幼児期の終わり頃ともいえる卒園間際の園児の母親は、自身の母親としての役割をどのように捉えているのかということを知るために、愛知県内の幼稚園に協力してもらって卒園式前に質問紙調査を実施しました。分析の結果「子どもを心理的に支える」という趣旨の回答が最も多く、次いで「子どもを教育する」、「子どもの日常生活の世話をする」という趣旨の回答がありました。

親としての役割の認識は社会的・文化的な影響を受けていることも考えられるので、他の国の状況が聞けることを期待して大会に参加しました。COVID-19の影響でオンライン開催になり思うように他の参加

者と意見を交わすことはできませんでしたが、大会のポータルサイト上で私の研究の地域性に関する質問があり、地域性にも着目して研究をする必要があるという課題を得ることができました。

国際学会大会の参加は今回が初めてでした。参加にあたり、日本保育学会交際交流委員会主催の国際学会派遣ワークショップの2回目と3回目に参加しました。登壇した先生方のアドバイスは参考になるものばかりで、日本語を単純に英語に置き換えないように留意する必要があることなどを学ぶことができました。また、ワークショップの質疑応答で同じ大会に参加する先生の存在を知り、ワークショップ後に繋がりを持つことができ大変心強かったです。

正直なところ、「国際学会ってなんかかっこいい」というミーハーな気持ちからのスタートでした。実際に参加してみて「国際学会はやっぱりかっこよかった」。今後も国際学会大会での発表に挑戦できるよう、研究と英語の勉強に励みます。ご支援を賜りましたこと、魅力的なワークショップを開催して背中を押してくださったこと、心より感謝申し上げます。

#### ◆主要国際保育系学会への若手派遣について◆

日本の保育学研究の進展のため、海外の保育学系の学会等で研究発表をする若手会員の支援をしています。

募集期間：1期：2月～5月、2期：6月～9月、3期：10月～翌年1月

金額：1名につき、上限額10万円

条件：筆頭発表者として研究発表を行う

申請希望者は、学会ホームページ「会員の皆様へ」→「各種委員会関係」→「国際交流委員会」

→「国際交流若手派遣について」をご覧ください。

## 新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

### 『基本的生活習慣の発達基準に関する研究—子育ての目安—』

谷田貝公昭・高橋弥生 編 2021年3月15日 一藝社

本書は、2019年に関東圏の幼稚園・保育所・認定こども園に在籍する子どもの保護者1000人以上を対象に実施した質問紙調査の結果をもとに、基本的生活習慣の発達基準を明らかにしている。1935～1936年に実施された山下敏郎の調査を精査し、本来の意味での習慣の標準年齢を示しているところが興味深い。これまで基本的生活習慣の発達基準とされていたものには、技術が身につく年齢と習慣化する年齢が混在していたが、本書は習慣として自立する標準年齢を示しているのである。例えば、これまでは「4

歳で顔を洗うことができる」としていたが、本書では「言われなくても顔を洗う習慣は幼児期には自立しない」という結果となっている。つまり、顔を洗う技術はあっても、顔を洗う行動は習慣になっていないということである。本書の発達基準を確認することで発達の見通しを持つことができるので、幼児期の発達課題である基本的生活習慣の指導をする際の目安となるだろう。

室矢 真弓 (横浜国立大学大学院生)

# リレー討論 「教育・保育の無償化—令和時代の保育学—」 VI

## ～子どもの育ちを大切にしたい社会とは～

齊藤 公彦

教育・保育の無償化によって、確かに保護者の教育・保育に係る経済的な負担は軽減されたものの、本来最も大切にしなければならぬ乳幼児期の子どもの生活は本当に保障されたのか。大人のための無償化ではなく、真に子どものための無償化となるためには、どのようなことが大切なのか。

### 無償化による保護者の感覚の変化

無償化によって、各園への保育料の直接的な支払いが大きく減額されたことで、経済的な負担が軽減されたことは明らかである。今までも園を選択する際には、働き方に応じて利用可能な時間や園へのアクセス等の利便性、園の教育・保育理念に共感してなど、様々な理由が考えられたが、今までは園の教育理念に共感したとしても経済的な負担感から敬遠せざるを得ない状況も容易に考えられた。それが無償化されたことによって保護者の園の選択肢は明らかに広がったのではないかと考えられる。ここで園を選択する際にどのようなことを大人が求めるかが非常に重要になってくる。経済的な負担の大小は依然として大きな要因ではあるものの、保育時間や通園時の利便性等の大人の都合を優先させるか、教育・保育内容等、園の理念に共感し子どもの育ちのために本当に必要なことを優先させるかで、この無償化の効果が子どもの最善の利益へと繋がるかが大きく変化するのではないだろうか。無償化前は、このお徳感と教育・保育内容への共感とが共存している中で保護者が園を選択しているような状況になっていたような気がするが、無償化によって、その二極化はよりはっきりと明確に進んできたのではないかと感じられる。保護者の選択によって、施設類型や園の教育・保育内容は異なるわけだが、教育・保育の無償化がなされたことにより、どの園を選択したとしても、子どもの育ちという側面での教育・保育の質は担保されているということが当然必要になってくるはずである。

### 各園における教育・保育の質的な保障

各施設類型によって、認可を受ける行政組織は当然異なるわけだが、その認可で重要とされていることは、あくまで教育・保育の具体的な質ではなく、運営上問題なく教育・保育が行われるための体制が整っているかが主なものになっているのではないかと考えられる。そもそも幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3つの要領等が方向目標を定めているということもあ

り、多くの都道府県や市町村の各自治体ではしっかりと具体的に質について語られることなく現在まで至っているのではないかと危惧される。教育・保育の質とは何かと問われたとき、その問いに対して、認可権限のある自治体が子どもの育ちに対する明確なビジョンを持ち、具体的な回答を語り尽くせることこそ大切で、待機児童解消のための義務的な利用調整ということではないのではないかと。教育・保育の無償化は、全ての子どもに質の高い教育・保育を保障するためのものであるはずが、現行の制度では、多くの自治体で教育・保育の質については各施設任せで、どの子どももそういった教育・保育が受けられているとは言い難いのではないかと感じられてしまう。各施設においての質的な部分については、非常に把握することが困難ではあるが、子どもの視点にたってもう一度考えていきたいものである。

### 子どもにとっての最善の利益とは

1989年に国連で採択され、1994年に日本で批准された子どもの権利条約は、子どもが幸せに生きるための世界共通の基準で、子どもは保護の客体であるだけでなく、大人とは別的人格を持つ独立した権利の主体であると明らかにしている。大人は子どもに関わることの全てにおいて、「子どもの最善の利益」とは何かを考えなくてはならない。大人が勝手に考える最善の利益であってはならず、権利の主体である子ども自身にとって最善の利益でなくてはならない。今の日本の乳幼児期の子どもがいる家庭では、経済的な負担等を解消するための、仕事と家庭の両立という問題を少なからず抱えている。産休や育休といった制度もあるが、現実的には企業側の負担も大きく、全ての企業で子どもを最優先してライフスタイルを考えられるという状況ではない。就労を支えることのみが大切なのではなく、子どもの育ちを支えるという視点を第一に考え、国、自治体、各施設の設置主体、企業等も含めて、全ての子どもに関わる可能性のあるところで、子どもにとって最善の利益となり得るライフワークバランスがどのようなものか、もう一度語り尽くされることを期待する。

### 教育・保育の無償化の先に期待すること

無償化によって、少しずつ乳幼児期の子ども育ちの重要性が社会全体に理解されていくことを期待しつつ、教育・保育がサービスとなくなってしまうようにしていくことが望まれる。経済的な負担軽減が図られた今、園への利便性や子どもを安く長く預け

られるお徳感だけでなく、教育・保育の質にも目が向けられ、子どもの最善の利益のために園の選択を真剣にできるようになっていくことを期待する。そのためには、各施設が自園の教育・保育の質に対して、常に真摯に学び続け、語り合いながら向上させていくような取り組みが必要なのではないか。また、各自治体でも子ども・子育て会議が創設・実施され、それぞれの自治体の子どもを取り巻く現状を踏まえて、子どもの育ちについて具体的に方向性が示されていると思われるが、理想と現実の乖離を解消するためにも、子どものことを考える行政の部署を統一し、既得権益に縛られず、新しい組織や施設の在り方、働き方改革を含めて、子どもに関わる全ての人の意見を踏まえて、子ども一人一人にとってという視点を大切にされた給付や補助の仕組みを伴う新しい

社会構造が構築され、それぞれが様々な選択肢の中から自分に適したライフワークバランスを選択できるようになることを期待する。そして、子どもを育てること自体を下支えできる温かい社会となっていくことで、最終的には子どもにとっての最善の利益に繋がり、次の日本をリードしていく人材を育てていくことにも繋がっていくことに期待する。

#### ●Profile

齊藤 公彦 (さいとう きみひこ)  
学校法人荻須学園 理事長  
(ひまわり幼稚園・桃花台ひまわり幼稚園・多治見ひまわり幼稚園・村中保育園・御嵩保育園・城ヶ丘こども園)  
ひまわり幼稚園 副園長・桃花台ひまわり幼稚園 園長  
愛知県公立中学校教員として勤務の後、各園での役職を経て現職  
公益社団法人名古屋私立幼稚園協会 副会長

## 私の文献リストから

このコーナーは、保育実践の発展のために会員諸氏が読まれている参考文献の紹介を目的とします。

青木 一永 (社会福祉法人檸檬会(レイモンド保育園) 副理事長)

1. 萩原元昭 (2020) 世界のESDと乳幼児期からの参画—ファシリテーターとしての保育者の役割を探る—. 北大路書房.
2. 西井麻美・池田満之・治部眞里・白砂伸夫 (2020) ESDがグローバル社会の未来を拓く—SDGsの実現をめざして—. ミネルヴァ書房.
3. 富田久枝・上垣内伸子・田爪宏二・吉川はる奈・片山知子・西脇二葉・名須川知子 (2018) 持続可能な社会をつくる日本の保育—乳幼児期のESD. かもがわ出版.
4. 角尾和子 (2008) プロジェクト型保育の実践研究—協同的学びを実現するために—. 北大路書房.
5. J.ヘンドリック、石垣恵美子・玉置哲淳監訳 (2000) レッジョ・エミリア保育実践入門—保育者はいま、何を求められているか—. 北大路書房.
6. Sylvia Chard, Yvonne Kogan, Carmen A. Castillo (2017) Picturing the Project Approach -Creative Explorations in Early Learning- (プロジェクト・アプローチの描写—幼児期の学びにおける創造的探究). Gryphon House Inc.
7. Sallee Beneke, Michaelene M.Ostrosky, Lilian G.Katz (2019) The Project Approach for All Learners -A Hands-On Guide for Inclusive Early Childhood Classrooms- (すべての学び手のため

のプロジェクト・アプローチ—幼児の包括的な学びに向けた実践ガイド). Paul H. Brookes Publishing Co.

8. 白井俊 (2020) OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—. ミネルヴァ書房.

#### 【研究内容】

さまざまな場面で目にするSDGsはすべての人々にとって重要な共通課題であり、ESDはその実現に大きな役割を果たすとされています。しかし、保育現場に身を置く者として、保育現場でのESDへの認識はまだまだ低いと感じており、持続可能な社会の創り手を育む保育者自身がESDを理解し実践していけるよう、乳幼児期におけるESDとは何かという点に問題意識を持っています。

そして、子どもの興味・関心に基づくのが保育だからこそ、「~をしているからESDだ」という活動面へのフォーカスではなく、保育者の関わり方にフォーカスする必要を感じています。その際、プロジェクト・アプローチにおける保育者の関わりがヒントになるのではと、こうした文献などからそのあり方を探っています。

## 第75回大会を開催するにあたって

大会実行委員長 阿部 真美子

日本保育学会第75回大会は、2022年5月14日(土)、15日(日)の2日間にわたって、開催されます。担当校は、千葉県松戸市にある聖徳大学です。皆様にキャンパスにお越しいただき、講演、研究発表、シンポジウム等に参加し、また会員間の交流を深めていただく心づもりでございましたが、第74回大会の経験から、オンラインで開催という決定が出されました。それ以降、学会事務局との連携のもと、オンラインによる開催のための準備を進めてきております。

大会の主な内容は、開会行事、社員総会・授与式、記念講演、学会企画シンポジウム、実行委員会企画シンポジウム、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表です。参加申し込みは始まっております。大会ホームページをご参照ください。

主な行事である開会行事、記念講演、大会企画シンポジウム等は、当日ライブ配信を行う予定です。それ以外の研究発表・自主シンポジウムは、資料や動画を専用のサーバーに事前にアップロードし、参加者がそれぞれで閲覧したうえで、当日の議論に参加する方式となります。詳細につきましては、大会ホームページをご確認ください。第74回大会で用いられた方式を踏襲しておりますので、慣れておられる方も多くいらっしゃると思います。

さて、大会のテーマですが、「アーリー・スタート～非認知能力研究の知見を保育に生かす～」と致しました。ここで使われるアーリー・スタートという言葉は、早期介入あるいは早期知的教育という観点からではなく、乳幼児期が人生のスタートラインに立つ重要な時期であり、そこを支える幼児教育・保育の役割を再考するという主旨から選びました。現代社会においては、人生のスタート地点にある乳幼児期の重要性は多くの国で、特に乳幼児にかかわっている研究者間で、そして実践の場で共有されていると思います。一方で、社会的、教育的には多様な課題があることは周知されているところです。

このような大会テーマに沿い、遠藤利彦氏(東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻教育心理学講座教授)に記念講演をお願いしご快諾いただきました。テーマは、「アタッチメントが拓く子どもの未来—非認知的な心の発達と保育者の役割」(仮)です。アタッチメント、非認知能力(あるいは非認知的な心の発達)にかかわる研究成果と知見に触れ、これからの幼児教育・保育実践や保育者養成にとって貴重な一歩を踏み出す機会につながると確信しております。

最後に、実行委員会企画についてです。医療的ケアを必要とする子ども(病児・病後児保育室、リハビリテーションセンター、保育所の取組を取り上げます)、地域と大学の連携で長年の蓄積のある「アート・パーク」の活動(聖徳大学の学生、地域の子どもたちも多数参加しています)、そして「国際幼児教育」(「ドキュメンテーション」をテーマに、スウェーデン、イギリスの話題提供者、日本の指定討論者で討論していただきます)の3つのシンポジウム、松戸市の子どものための施策と取組(市役所子ども関連の担当課の協力をいただいています。この中で幼稚園に設置された小規模保育所を紹介する予定です)、新型コロナウイルス感染拡大下で学生たちが作成した動画(乳幼児に楽しんでもらいたいという気持ちを込めています)、聖徳大学所蔵の子ども関係の貴重資料の動画を準備中です。

ご多忙とは存じますが、万障お繰り合わせの上、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

### ■『保育学研究』第59巻第1号発送について■

2021年9月に発送いたしました、『保育学研究』第59巻第1号に多数の誤配が発生いたしました。会員のみなさまにはご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。

2021年8月31日までに年会費を納入済みの会員のみなさまには、すでに発送を完了しております。また、2021年9月1日以降に年会費の納入された会員のみなさまへは、順次発送を行っております。

この件に関するお問い合わせは、一般社団法人日本保育学会事務局までご連絡ください。

E-MAIL : hoiku@fj8.so-net.ne.jp

## ■ 第75回大会開催案内 ■

2022年5月14日（土）・15日（日）

聖徳大学（オンライン開催）

大会テーマ：アーリー・スタート～非認知能力研究の知見を保育に生かす～

### ◆オンライン開催の方法について

自主シンポジウムや口頭発表は大会開催期間の前に、動画を作成し、オンライン上で大会参加者に公開していただきます。ポスター発表も事前にポスターを作成、公開いただきます。また、各発表者には、大会当日にオンライン上で質疑応答を行っていただきます。これらをもって、学会報告をしたものとみなします。

### ◆直前参加登録について

2022年4月頃開始予定です。  
支払い方法はクレジットカード払いのみとなります。

詳しくは、大会ホームページ及び第3号通信（2022年2月予定）をご覧ください。

第75回大会ホームページ：<http://confit.atlas.jp/hoiku75>



## 海外レポート

### 韓国のオリニチプにおける「保育統合情報システム」の構築・運営

崔美美（学習院大学）

諸国の保育現場において、保育者の負担を減らすために、ICT等の活用による業務効率化と業務改善に取り組まれている。韓国保健福祉部（2021年6月15日の報道資料）においても、2021年6月14日より「保育教職員統合情報サービス」が開始された。保育教職員を対象にワンストップサービスを提供する「保育教職員の国家資格証（<https://chrd.childcare.go.kr/>）」（韓国保育振興院の運営）には、保育教職員資格の申請・発行、教育申請などの既存のサービスのほか次の新たな機能が含まれている。①人事記録カードの管理 ②勤務経歴、教育履修、資格情報の管理 ③勤務状況や休職・免職の申請 ④オンライン求人・求職 ⑤保育教職員の給与照会 ⑥給与の模擬計算機能など保育教職員に関する情報照会および各種申請のオンラインサービス。今回、システムの機能を改善することで、保育教職員が自治体や関係機関に訪問して、発行していた各種証明書に加えて、保育教職員の勤務履歴及び資格内容、教育履修現況の証明書などを

オンラインで簡単に出力できるようになった。また、保育教職員がオリニチプ（保育所に相当する）に採用時に提出する採用健康診断書について、保健所で健康診断を受けた場合には、その健康診断結果書をオリニチプ園長に別途提出する必要なく、保健所の地域保健医療情報システムと連携してオリニチプに提供されるようになった。さらに、中央育児総合支援センター（1か所）と市道育児総合支援センター（18か所）の情報システムの老朽化に伴う不便さを解消するために、クラウドへ移行して、より効率的に活用できるように改善した（例：手書きの書類の電算化）。韓国政府は、既存の保育統合情報システムの機能改善（2020年12月29日一部改正「嬰幼兒保育法」第9条の3「保育統合情報システムの構築・運営」）を通じて保育教職員とオリニチプの行政業務を最小化し、保育教職員が保育に専念できる環境を整えていくために継続的に取り組んでいる。

### ◆学生会員の登録（年会費の学生割引） 申請について◆

学生会員の登録は、年度毎の申請が必要です。  
2022年度学生会員の登録を希望される方は、以下の  
手順で申請してください。

- (1) 学生証（入会希望年度の有効期限内であること）を両面スキャンし、学生証画像データを準備してください。
- (2) 「会員専用ページ」よりログインしていただき、「会員情報」の指定箇所に学生証画像データをアップロードしてください。
- (3) Mailに学生会員登録申請書（学会HPよりダウンロード）を添付して、事務局に学生証画像データをアップロードした旨をご連絡ください。

Mail : hoiku@main.so-net.jp

学生会員登録申請書はこちら :

[http://www.jsrec.or.jp/?page\\_id=63](http://www.jsrec.or.jp/?page_id=63)

**受付期間 2022年4月1日～4月10日**

※申請が受理された方は、年会費が学生会員価格  
(6,000円) となります。

期日を過ぎた場合は、一般会員での登録となります。

### 日本保育学会中部地区第5回研究集会

日 時 : 2022 (令和4) 年3月21日 (月・祝)  
13時～15時

会 場 : オンライン (Zoom) ※上限500名

テーマ : これからの「幼児教育」施設と小学校との  
円滑な接続にむけて

—北陸地区の幼小接続の取り組みを中心に—

登壇者 : 鯖江市立北中山小学校・幼稚園

校長・園長 小田島範和

金沢大学学校教育学類教授 滝口圭子

司会者 : 富山大学人間発達科学部教授 小林 真

参加費 : 無料

申込期間 : 2022年1月20日 (木)～3月20日 (日)

※非会員の参加可

申込方法 : 以下のQRコードからお申込みください。

※定員に達し次第終了

問い合わせ先 : 日本保育学会中部地区

[chubu.hoiku@gmail.com](mailto:chubu.hoiku@gmail.com)



### 会報第183号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるって  
お寄せください。

#### ①海外レポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、  
海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

#### ②新刊図書を紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味  
深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想  
を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

#### ③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介  
ください。文献は、著書、論文など15冊(編)以内。  
内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、  
邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って  
研究しようとしている(関心をもっている)分野についても、  
お書きください。

【字 数】 ①800字以内(写真1葉は200字に換算)

②400字以内

③800字以内

【締め切り】 2022年2月28日必着

【送付先】 Mail : hoiku@main.so-net.jp

作成いただくデータはWord (windows) ファイルで  
お願いします。ファイル名にご自身の氏名を記載  
してください。

メールには、氏名、会員IDを明記してください。

### 編集後記

会報182号をお届けいたします。今号では、特集として「  
保育における主体性を問う」といたしました。またその他にも  
リレー討論、次年度の75回大会に向かって、などが掲載  
されています。それぞれの原稿については、会員からの投稿  
をお待ちしておりますので、奮ってご応募ください。

また、現在、広報委員会では、将来的に会報を電子化  
することについて検討が始まっております。詳しくはまた  
会報やホームページで報告させていただきますので、よろ  
しくお願いします。

広報委員会委員長

名古屋市立大学 上田敏文

編集 : 広報委員会

上田敏文 有村玲香 伊藤能之 亀山秀郎

木村創 松山由美子 淀川裕美

広報委員会協力委員

佐久間美智雄 柴田賢一

※事務局ではテレワークを実施しております。お問い合わせに関しましては学会ホームページの

「お問い合わせフォーム」よりご連絡ください。